

日本音楽聞書帖

みゆうしゅくじやばんりすにんくのうと

(142)

江戸の夏その清涼感

笹井邦平

切れと味わい 熟れた芸

本條秀太郎の会—端唄—江戸を聞く「蜻蛉」(7月31日・紀尾井小ホール)。

本條秀太郎の端唄の演奏会は夏に因みサブタイトルは「蜻蛉」と題して21曲を弾き唄う。

〈第一部 開口「お祭り」「なすとかぼちゃ」「たてやま節」「お互いに」「ころもり」「川風に」「五月雨(池の)」「止

めても帰る」「夕顔の」(唄・三味線

—本條秀太郎、三味線—本條秀五郎)。
どこからともなく水琴窟の音が流れてきて清涼感溢れる幕開き。背景の白地の屏風には青々とした夏の葉が一枚下がり舞台下手脇には竹が一本真っ直ぐに飾られ夏気分を匂わす。

小気味良い前弾きで「祭り」を唄い唄尻の〈木遣〉が江戸情緒をそそる。「なすかぼ」はテンポ良く賑やかで厚みがある。「ころもり」にあしらう〈佃〉が涼しげ。「止めても帰る」は後ろ髪引かれる未練が残り「夕顔」の唄尻へ振られついで夜の雨で恋の苦さを噛み締める。お得意のトークなしの演奏のみで勝負して休憩に入る。

〈第二部 水の出花」「蛇山」「足りないだらけ」「大工さん」「嘘と誠」(高尾太夫「金閣寺」(雪姫)「お伊勢参り」(お染久松)「心して」(鶴八鶴次郎)「大津絵」(梅川忠兵衛)「槍さび」(忠臣蔵)「波の上(平知盛) 結び「薄墨」(唄・三味線—本條秀太郎、三味線—本條秀五郎)。第二部は屏風に掛け軸が掛かり、本條は白無地の着付に袴という涼

し気ないでたちで始まる。「水の出花」に秀五郎の低音三味線が入り厚みが出る。「蛇山」は「東海道四谷怪談」の一場をモチーフにした作品ながらどこかユーモラスな味わいが漂う。「足りないだらけ」は益田太郎冠者の洒落た作品。「嘘と誠」から「波の上」まで芝居の一場面をダイジェストした小洒落た作品が続く。「お伊勢参り」は(野崎の合方)の三味線の高低合奏が迫力あり、「波の上」は(碓知盛)の怨念が彷徨う。芝居がいかに庶民に愛されそこから端唄という流行唄が生まれ市井に浸透したかがよく解る。

締め歌の歌澤「薄墨」は一中節を基本として生まれたジャンルだけに深さと厚みがありグレードが一段上がる。太棹の代わりに入れた低音三味線に風情があり薄墨で書く切ない恋文に籠めた報われぬ儂き想いが溢れる。
十数年前に聴いた切れ味の鋭い三味と甲高いナイーブな唄声は健在、それに味わいが加味され熟れた芸になってきた感がある。夏気分溢れる粋と情緒を湛えた端唄を堪能する。